

教えてもらった話

～私たちが大切なことだと感じたこと～

Vol 6

ご自由にお持ち帰りください。



安心・快適そしてワクワク

株式会社 くるま生活

貴重品

学生時代ホテルの温泉でバイトをしていた時の話。

老夫婦がフロントにやってきたので

いつも通り

「貴重品等がありますか？」

と聞くと

旦那さんは少し考えた後

「こいつ」

と奥さんを指差した。

奥さん顔真っ赤にして

「そんな大層なもんじゃないです…」

と恥ずかしそうに言っていた。

いつかあんな夫婦になりたい。温情ある判決

京都市伏見区桂川河川敷で2006年2月1日、無職片桐康晴被告が、認知症の母親を殺害して無理心中を図ったとみられる事件の初公判でのやり取りを知っているだろうか。自然と涙が出てきてしまう。

この事件は認知症の母親の介護で生活苦に陥り、母と相談の上で殺害したというもの。片桐被告は両親と3人暮らしだったが、95年に父が死亡。その頃から、母に認知症の症状が出始め、一人で介護した。母は05年4月ごろから昼夜が逆転。徘徊で警察に保護されるなど症状が進行した。片桐被告は休職してデイケアを利用したが介護負担は軽減せず、9月に退職。生活保護は、失業給付金などを理由に認められなかった。

介護と両立する仕事は見つからず、12月に失業保険の給付がストップ。カードローンの借り出しも限度額に達し、デイケア費やアパート代が払えなくなり、06年1月31日に心中を決意した。

最後の親孝行に、と、片桐被告は31日は、車椅子の母を連れて京都市内を観光し、そのまま桂川べりで夜を明かす。2月1日早朝、同市伏見区桂川河川敷の遊歩道で「もう生きられへん。此処で終わりやで。」などと言うと、母は「そうか、あかんか。康晴、一緒やで」と答えた。片桐被告が「すまん」と謝ると、母は「こっちに來い」と呼び、片桐被告が母の額にくっつけると、母は「康晴はわしの子や。わしがやったる」と言っ

た。この言葉を聞いて、片桐被告は殺害を決意。母の首を絞めて殺し、自らの首も包丁で切ったが、母の遺体の横に倒れているのを発見され、一命を取りとめた。

「母の介護はつらくはなかった。老いていく母がかわいかった」。

「母の命を奪ったが、もう一度母の子に生まれたい」

片桐被告は語った。

冒頭陳述の間、片桐被告は背筋を伸ばして上を向いていた。肩を震わせ、眼鏡を外して右腕で涙をぬぐう場面もあった。目を赤くした東尾裁判官が言葉を詰まらせ、刑務官も涙をこらえるようにまばたきするなど、法廷は静まり返っていた。判決で東尾裁判官は「献身的な介護を受け、最後は思い出の京都市内を案内してもらい、被告に感謝こそすれ決して恨みなど抱かず、厳罰も望んでいないだろう」と、母親の心情を推察。半面、「公的支援が受けられず経済的に行き詰まった」と行政対応に苦言を呈した。被告は昨夏、何度か社会福祉事務所に生活保護の相談に行った。しかし「頑張って働いてください」などと門前払いされた。この対応に「被告が『死ぬということか』と受け取

ったのが本件の一因とも言える」と裁判官。「介護保険や生活保護行政のあり方も問われている」と強調した。

「痛ましく悲しい事件だった。今後あなた自身は生き抜いて、絶対に自分をあやめることのないよう、母のことを祈り、母のためにも幸せに生きてください」

裁判官が最後にこう語りかけると「ありがとうございました」と頭を下げた被告。判決後、弁護士に「温情ある判決をいただき感謝しています。なるべく早く仕事を探して、母の冥福を祈りたい」と語ったという。

人間が本当に成長するのは、失敗したときだけ

今の「一番うまくいっている部分」を支えているのは、「一番うまくいかなかった失敗」があったから

でも、実際に、「失敗した当時」は、死ぬほど落ち込んだでも「失敗ウェルカム」やって

失敗したら、とりあえず「よっしゃ、失敗！きた！」って喜ぶ

そうしたら、完全に、失敗を克服する準備ができる

オレは、すでに、すべての失敗を、経験済み

経験済みだから、みんなの質問に、1秒で答えられるんやで

****丸尾孝俊****（バリ島の大富豪アニキ）

『熱く語る将来』 柳原加奈子

私は、卒業文集に将来の夢をかけるのが、すごくうれしいです。私が今まで将来について決意した事を、楽しく書けたらいいなと思っています。歌手・ピアノの先生、学校の先生と、色々夢を広げていったけど、やっぱり大好きなお笑いの道へ進みたいと思っています。いつまでも、テレビや雑誌の前で笑っているだけじゃ、やっぱりつまらないです。今、人気の芸人さんも、最初はとてもつらかったと思います。いつかテレビで、お笑いコンビが、「ぼくたちが、始めてもらった給料の五百円、今でも大切に持っているんだ。」と、ふうとうに入っている五百円を見せてくれました。私はその時、心が熱くなりました。大変だからこそ、やりがいがあるんだなと思いました。でも、それを乗り越えることができたから、こんなに輝いて見えるのだと思って感動しました。

こうして私のお笑いだましいはさらに燃えあがりました。私

がお笑い芸人になったら、ただ、おもしろいだけじゃなくて、人を明るくできるようにになりたいです。おなかの底から笑って、イヤな事をス〜ッと忘れさせてあげられる、そんな芸人さんになりたいです。私達は、あと少しで卒業してしまうけど、岩井臨海学園で泳いだことや、交通安全パレードであこがれの主指揮をやったことなど新井小学校での楽しい思い出をいつまでも大切にしたいです。そしていつか、私が有名な芸人になったら、また新井小学校に遊びに来たいです。

こうして私には、たくさんの夢があります。あこがれの芸人になるため、これからもがんばります。

星野監督

星野監督は小学校時代、岡山県倉敷市で過ごしていました。同級生に、ジストロフィという重い障害を持った定金正憲君という友達がありました。彼は学校に行くのをいつも嫌がって、お母さんを困らせていましたが、星野監督と同じクラスになってからは毎日喜んで学校に行くようになりました。星野監督が定金君を毎日背負って登校してくれたからです。

定金君は放課後も楽しそうに星野監督が野球をしている姿を眺めていました。星野監督がどんなに練習が厳しくて疲れていても、練習が終わると、定金君を背負って彼の家に送って行きました。雨の日には定金君が濡れないように、リヤカーに乗せて連れて行ったそうです。

定金君との交流は、小学校卒業して大人になっても続きましたが残念ながら彼は 41 歳で亡くなってしまいます。なくなる少し前にも定金君は「頑張ってください。優勝してください。いつも僕は見えています。」と星野監督に話していました。残念ながら星野監督が優勝したのは定金君が亡くなった2週間後でしたが定金君のお母さんは、「息子が 42 歳まで生きてこれたのは、星野さんのおかげです。息子は、星野さんの活躍を見て、夢と希望をもらっていたんです。息子にとって星野さんは同級生で神様だったんです。息子は幸せだったと思います。感謝しています」と話しています。

****大切な人に贈りたい 24 の物語****より

****空気****

ある女性のご主人はとても真面目な人でした。毎日のように

お酒も飲まないで、まっすぐに家に帰ってくるし休日は家で本を読んでいるような人でした。結婚するときは、真面目な人と結婚するのが一番幸せだと思っていた彼女ですが、活動的な彼女は、ご主人のこの性格が だんだん不満になってきました。もっと、二人で旅行に行ったり、スポーツをしたり外食を楽しんだり、いろいろなことを体験したいと思っていました。

ある日、彼女はご主人に「あなたの性格についていけません。退屈な毎日が嫌になったのもう一緒に暮らせません」と言って、家をでてしまいました。一人で旅行をしたり、外食を楽しんだりと遊び回っていたのですが、いつまでもそのような生活は続きませんでした。

遊び回る生活に飽きた彼女はある日友人の家に泊めてもらったときに「もう一度、ご主人に嫌なところをしっかりと伝えて直してもらえばいいじゃない」と友人に説得されて、家に戻ることにしました。そして、彼女はご主人に「1週間に一度はレストランに食事に行くこと年に3回は旅行に行くこと……」などいろいろと要望を言いました。

何も言わずに黙って聞いていたご主人にイライラした彼女は

「あなたも私に言いたいことがあると思うの。この際だから言ってくれる？」と尋ねました。ご主人は「私の望みは、あなたが幸せになることだから・・・」と彼女見つめて静かに話しました。

私もそうですが、本当の幸せに気づかないで相手に不満をいってしまうことがあります。人は空気を毎日、当たり前のように吸っていますが無くなれば2分も生きられません。

自分の周りにはいる空気のように当たり前で大切な人に気付くことが必要です

大切な人に贈りたい24の物語より

【子供にやってはいけない叱り方、十ヶ条】

1. 感情的に叱る
2. 子供の言い分を聞かずに叱る
3. くどくどといつまでも叱る
4. 自分の都合で叱る
5. 両親が一緒になって叱る
6. 誰かと比べて叱る

7. 昨日と今日で言うことを変えて叱る
8. 全人格を否定する言葉や子供を突き放す言葉を使って叱る
9. 昔のことまで引っ張り出して叱る
10. 愛情のない体罰で叱る

お母さんの生きざま

知里ちゃんが、母の優しい手に気付いたのは四年生のときだった。母には義父にあたるおじいちゃんを病院に見舞ったときのことだ。祖父七十二歳。四年前にがんセンターで大手術を受けた。このごろ胸が苦しくてさすってもらうようになっている。

「背中さすりましょうか」と母

「すまん。ああ気持ちいい」と祖父は目を閉じていた。

と、突然、苦しく吐きそうになる。お父さん！だいじょうぶ口元に、さっと母の手が差し出された。

「遠慮せずに吐いて。さあ早く」

両手でおじいちゃんの吐いたものを受け取った。

知里ちゃんも思わず手を出し

「おじいちゃん出して」

帰り道、知里ちゃんと言う。

「普通ならごみ袋、ごみ袋って言うと思うのお母さん偉い」

家で父と話す。「うん、お母さんには頭が下がる。実の親子でもなかなかできんね」

母が言う「何が気持ち悪いの。お母さんが小さいとき、茜部(実家)のおばあちゃんもおじいちゃんのおむつの世話してたのよ」

父は母の手をぎゅっと握った。

知里ちゃんと言う。

「お母さんの手は世界で1番綺麗な手です」と

『お母さんのやさしい手』という題で。知里ちゃんは、これを作文に書いています。汚物が入った手は、目に見える世界では綺麗だとは言わない。しかし、この女の子には、その手はお母さんの心を表した。大変綺麗なものに見えたのです。こういうことをわかる人間でありたいと思います。

その上で、ひとのために尽くすときにはローソクのようにでありたい。ローソクというのは、他のローソクに火を移しても決して自分が暗くなることはないのです。自分に与えられた命、炎をずっと燃やし続けていく。周囲を明るくしながら、伝えながら。

そんな思いを、小学校六年の女の子が、こんなふうには作文に書いています。『生きることの尊さ』という題です

先生にお父さんのいない子の話をしてもらいました。私もお父さんを交通事故で亡くしました。だから作文を書いた子どもの気持ちがとてもよくわかりました。「あなたのお父さんはどんな仕事をしているの」と聞かれると胸が裂けそうになるほど辛くなります。でも我慢して「お父さんいないのよ」と言います。そうするとみな「嘘でしょう。嘘でしょう」と言います。

嘘ならどんなにいいだろう。

嘘ならどんなにいいだろうとそう思います。

だけど家に帰ってみるとやっぱりお父さんはいないのです。

何故だかしらないけれど、ものすごく寂しくなることがあります

ます。手を引いて歩いてくれたお父さん。肩車をしてくれたお父さん。私の心の中に今も生きているのに、どうして声を出してくれないのですか。

きっとお母さんを大事にします。そしてお父さんに喜んでもらえるローソクのような人間になりたいと思います。きっときっとお母さんを大事にしますから

「自分が好きですか」 林 覚乗 著 西日本新聞社より

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

ホンの少しですが、この冊子を手にとられたすべての人が心豊かになることを祈念しております。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。

私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。

①人に存在を認められる事

②素敵な想いが実現すること事

私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように
仕事させていただきます。(*^^)v

〒720-0961

広島県福山市明神町2丁目9-25

株式会社くるま生活

代表取締役社長 井上康一

TEL 084-943-7123

info@kurumaseikatsu.co.jp

第6回作成 2014年3月6日

コピー大歓迎。何部でもお届けします。